

十勝岳の火山活動解説資料（令和3年1月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

十勝岳では、2006年から2017年秋頃にかけて山体浅部が膨張し、その状態が現在も維持されています。火山性地震の一時的な増加、火山性微動や火山性地震と同期した傾斜変動は時折観測されており、振子沢噴気孔群や62-2火口では地熱域の拡大や高温の状態が確認されています。火山活動の活発化を示唆する現象が観測されていますので、今後の活動推移には注意が必要です。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴煙などの表面現象の状況（図1-①～⑤、図2-①～④、図3）

監視カメラによる観測では、62-2火口の噴煙の高さは火口縁上200m以下でした。大正火口の噴煙の高さや振子沢噴気孔群の噴気の高さは、悪天や強風等のため観測できませんでした。

・地震活動等の状況（図1-⑥～⑨、図2-⑤～⑥、図4～5）

火山性地震はやや少ない状態で経過しました。地震は、62-2火口付近のごく浅い所、旧噴火口付近、及びグラウンド火口付近の標高0kmから海面下1kmで発生しました。

火山性微動を2回観測しています。

・地殻変動の状況（図2-⑦、図6）

62-2火口近傍に北海道大学が設置した前十勝西の傾斜計では、火山性微動や火山性地震と同期して、62-2火口方向が上がる、または下がるような傾斜変動を時折観測しました。

GNSS連続観測では、2006年頃から2017年秋頃まで山体浅部の膨張を示す変動が観測されていましたが、それ以降、山体浅部の収縮を示す変動が観測されています。収縮を示す変動量は小さいため山体浅部が膨張した状態は維持していると考えられます。

深部へのマグマの供給によると考えられる地殻変動は認められません。

この火山活動解説資料は、札幌管区気象台のホームページ(<https://www.jma-net.go.jp/sapporo/>)や気象庁のホームページ(https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)でも閲覧することができます。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、北海道大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国立研究開発法人防災科学技術研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。また同院発行の『電子地形図（タイル）』を複製しています。

次回の火山活動解説資料（令和3年2月分）は令和3年3月8日に発表する予定です。

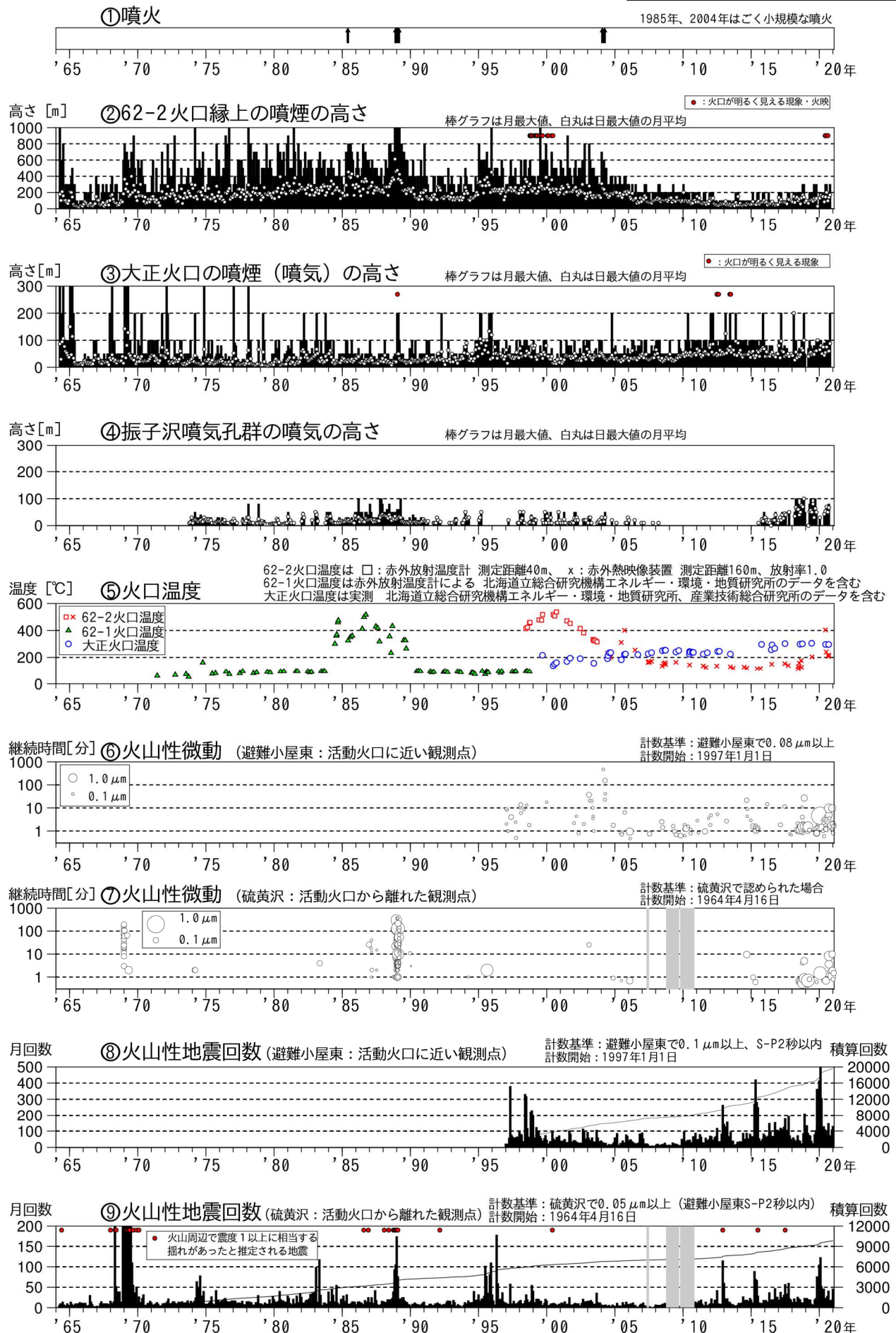


図1 十勝岳 火山活動経過図（1964年1月～2021年1月）

⑦⑨：グラフの灰色部分は機器障害による欠測期間を示します。

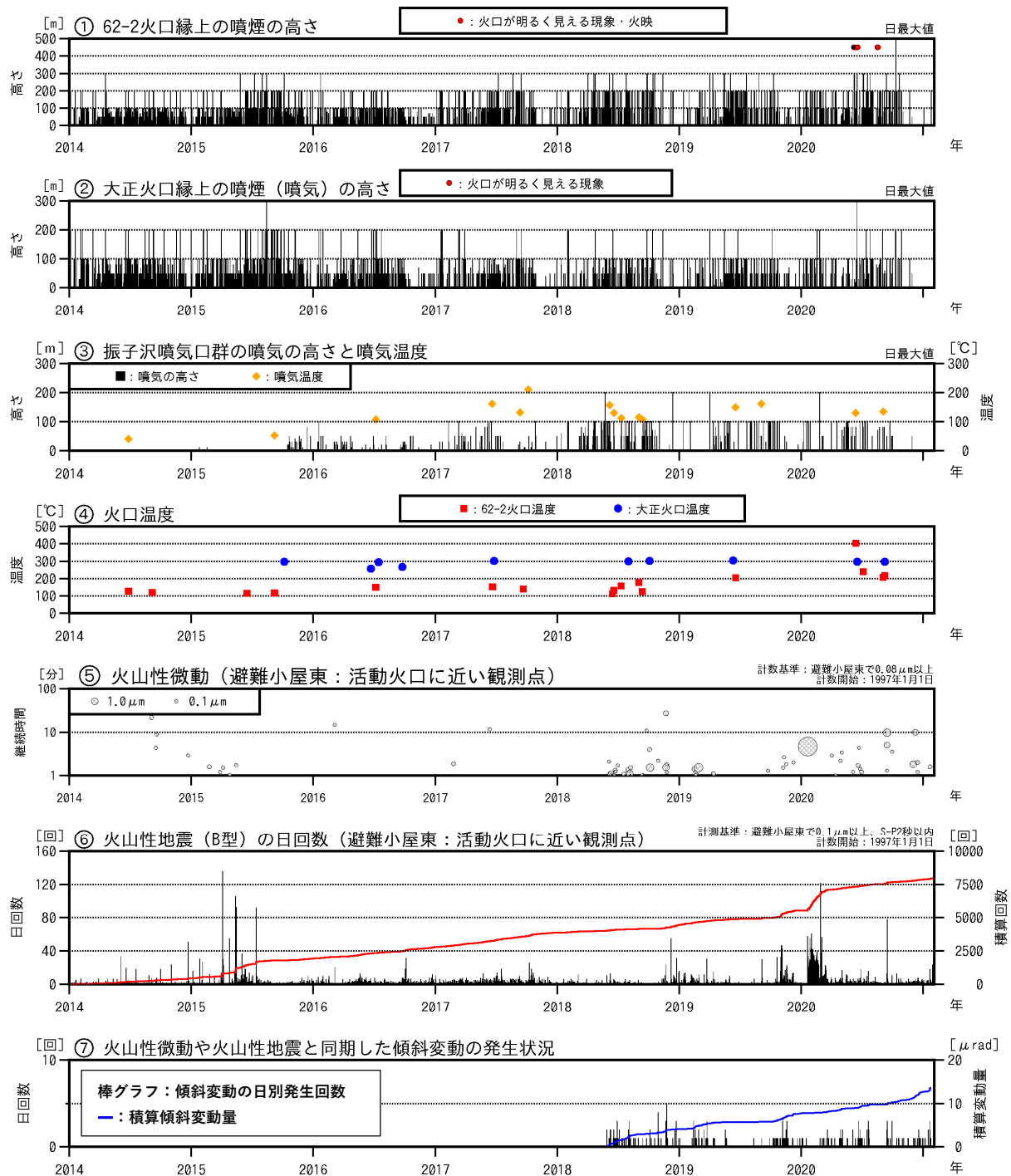


図2 十勝岳 火山活動経過図（2014年1月～2021年1月）

- ③の噴気温度は、赤外熱映像装置により測定しています。
- ④の■は、図1-⑤の×に対応しています。図1-⑤のキャプション・注釈をご参照ください。
- ⑥は、主に62-2火口付近のごく浅い所（図4中の破線に囲まれた領域内）で発生したと推測されるB型地震の回数を示します。
- ⑦は、北海道大学が設置した前十勝西（北）傾斜計における傾斜変動が、南北成分・東西成分ともに変動量 10^{-8} radian以上 10^{-6} radian未満となる事例を対象としています。積算傾斜変動量は、前十勝西（北）傾斜計における傾斜変動の南北成分・東西成分の合成傾斜変動量の積算値を表します。



図3 十勝岳 北西側から見た火口周辺の状況及び火口周辺図
(1月26日、白金模範牧場監視カメラによる)

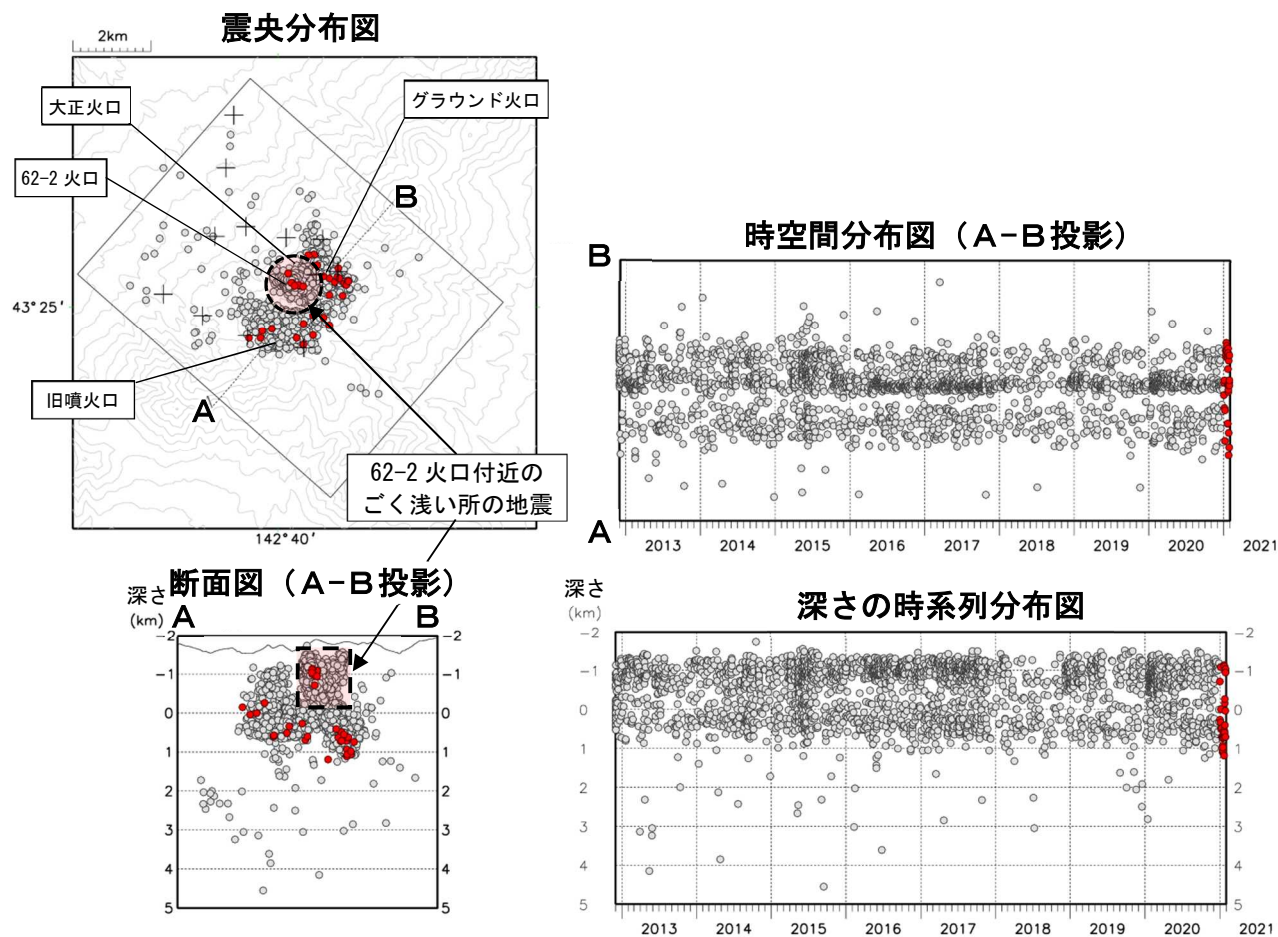


図4 十勝岳 火山性地震の震源分布（2012年12月～2021年1月）

●：2012年12月～2020年12月の震源 ●：2021年1月の震源

＋：地震観測点

- ・地震は、62-2火口付近のごく浅い所（図中破線に囲まれた領域内）、旧噴火口付近、及びグラウンド火口付近の標高0 kmから海面下1 kmで発生しました。

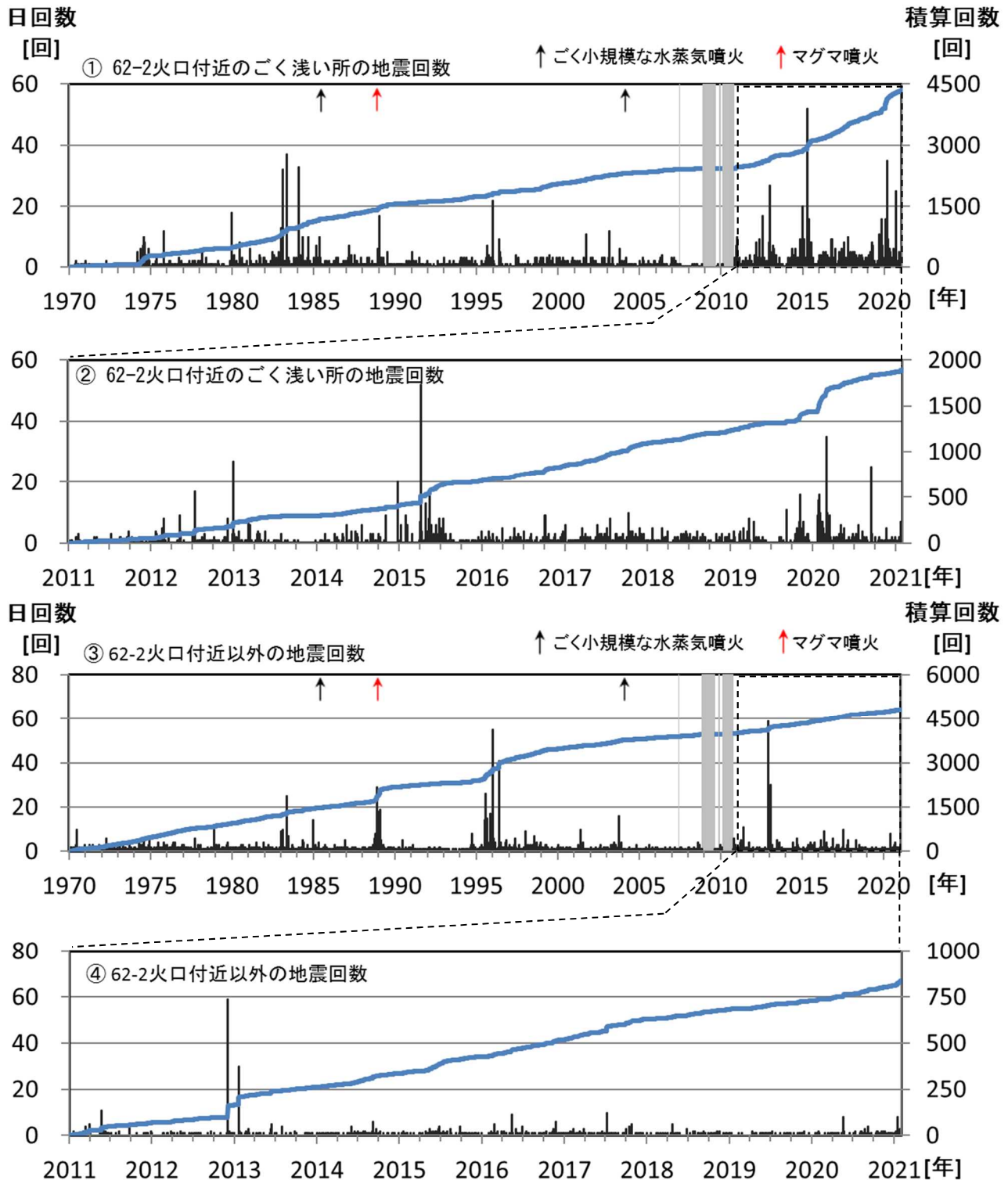


図5 十勝岳 地震の日回数及び積算回数（①③：1970年～2021年1月 ②④：2011年～2021年1月）
 硫黄沢観測点（山麓点）で計測した回数（計数基準：0.05 μ m以上）を示します。
 ①、②は主に62-2火口付近のごく浅い所（図4中の破線に囲まれた領域内）で発生したと推測されるB型地震の回数を示します。また③、④の「62-2火口付近以外」は、主にグラウンド火口周辺や旧噴火口付近などで発生したと推測されるA型地震の回数を示します。
 図中の、青線は積算回数を示し、灰色の部分は欠測を示します。

・62-2火口付近のごく浅い所（図4中の破線に囲まれた領域内）で発生する地震は、山体浅部における火山ガスや熱水などの活動に関連して発生していると考えられます。これらの地震は、2010年頃からやや多い状態となっています。

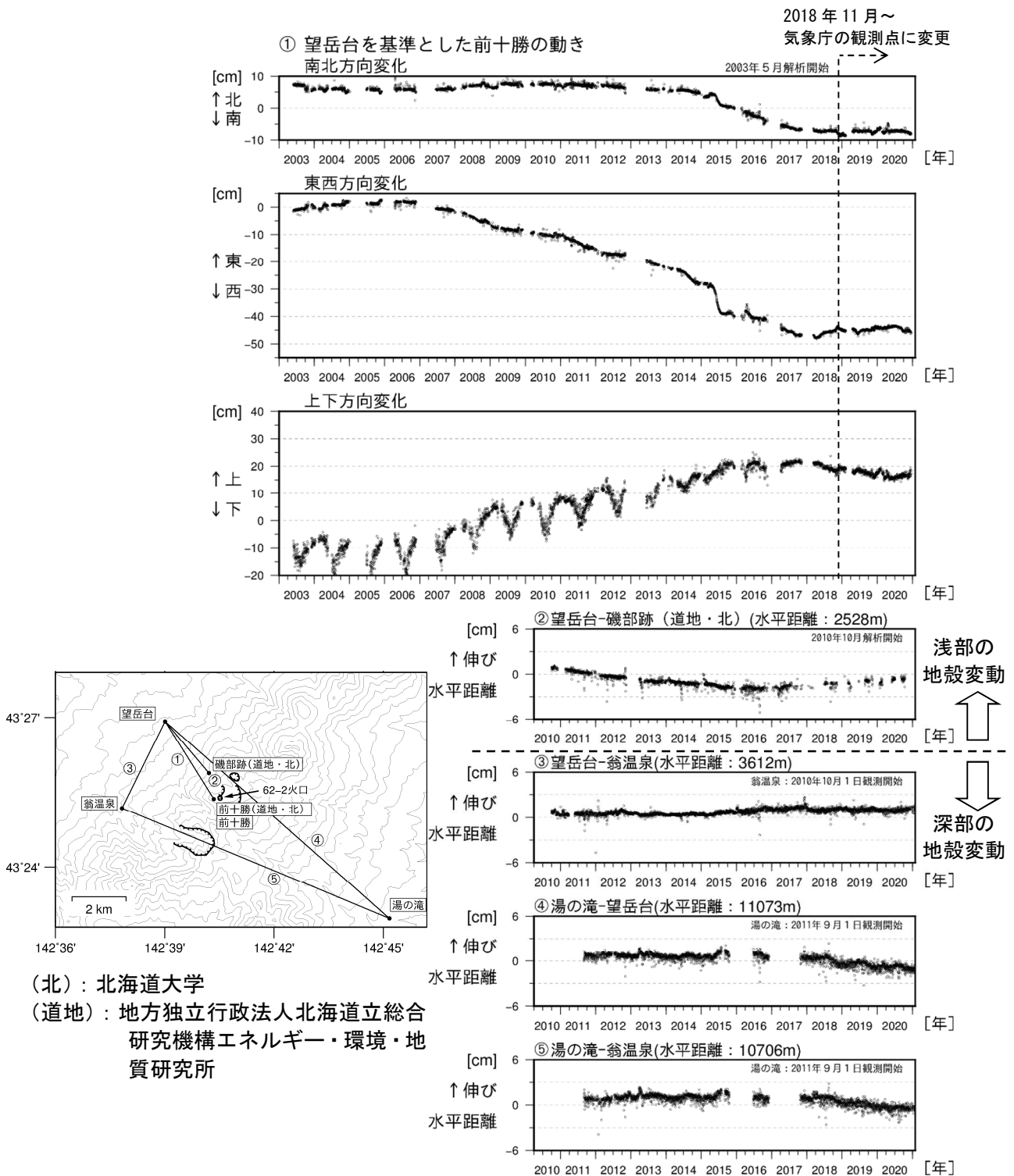


図6 十勝岳 GNSS連続観測による南北・東西・上下方向変化及び水平距離変化（2003年5月～2021年1月）、観測点配置図

GNSS基線①～⑤は観測点配置図の①～⑤に対応しています。
GNSS基線の空白部分は欠測を示します。
GNSS基線④～⑤中の破線は、観測機器の交換時期を表します。
2010年10月と2016年1月に解析方法を変更しています。
前十勝観測点は2020年12月18日から欠測しています。

- ・ 2006年頃から2017年秋頃まで山体浅部の膨張を示す変動が観測されていましたが、それ以降は山体浅部の収縮を示す変動が観測されています。収縮を示す変動量は小さいため山体浅部が膨張した状態は維持していると考えられます。
- ・ 深部へのマグマの供給によって考えられる地殻変動は認められません。

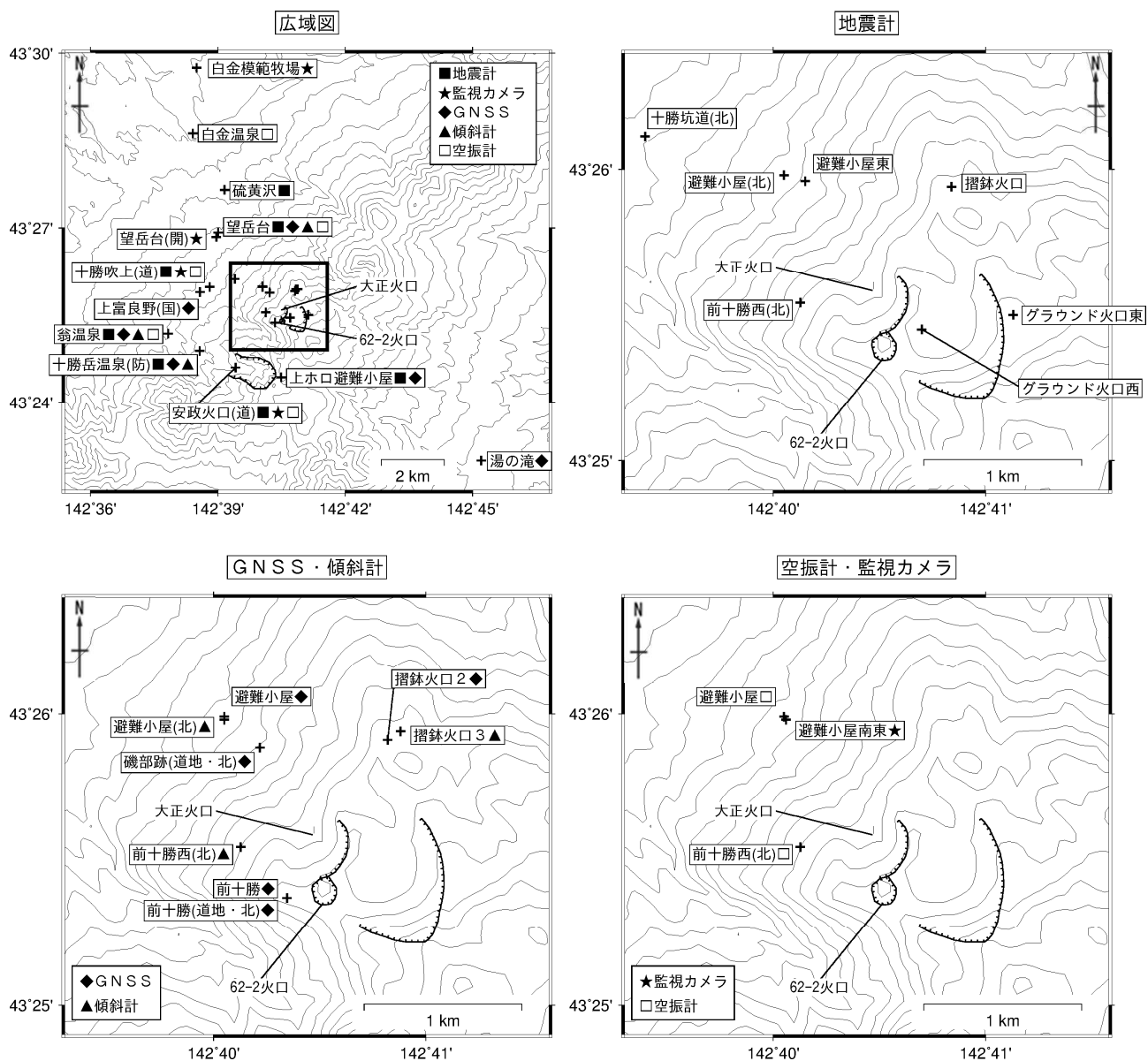


図7 十勝岳 観測点配置図

各機器の配置図は、広域図内の□で示した領域を拡大したものです。

＋印は観測点の位置を示します。

気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。

- (開) : 国土交通省北海道開発局
- (国) : 国土地理院
- (北) : 北海道大学
- (防) : 国立研究開発法人防災科学技術研究所
- (道) : 北海道
- (道地) : 地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所